



フロントランナー

Front Runner

徹底的に学ぶ。既成の議論を疑い、歩き、探究を続ける。「常に『前進』の人。とらわれなく自分を更新させていく」。大学院生時代に自主ゼミで共に学んだ松村圭一郎・岡山大准教授は言う＝京都市上京区

文化人類学者
立命館大教授

おがわ
小川 さやかさん (42歳)

人間社会の混沌 密着する新世代

人なつこさと度胸を武器に、異境へ向かう。各地でたれこめる分断の暗雲にも臆さず、軽々と壁を乗り越えてゆく新世代の学究である。

今年の河合雄雄学芸賞と大宅壮一ノンフィクション賞をダブル受賞した『チョンキンマン』のボスは知っている。香港が舞台。はるかアフリカから一獲千金を夢見てやって来たタンザニア人たちに2016年秋から半年以上密着し、「魔窟」と呼ばれる雑居ビルを拠点にうごめく中古品輸出ビジネスを内側から活写した。

約束はいつも大幅遅刻、下ネタ連発、借金の依頼など、ダメ人間ぶりが憎めない「ボス」や同胞たちの関係は独特だ。互いを信用せず踏み込まない個人主義の一方、できる範囲で助け合うシェアのしくみがある。

「グローバル化の競争の末端で折り合いをつけながら、贈与や分配の世界観も息づく。矛盾し、せめぎあうもの同士の共存が面白いんです」

専門は経済人類学・アフリカ研究。01年、京都大大学院から単身、タンザニアへフィールドワーク（現地調査）に出かけ、都市の路上商人に声をかけられたのがすべての始まりだ。

何の後ろ盾もない貧しい若者たちが、行き交う人々を真によく観察していることに感心した。だまされたまされの「ウジャンジャ」（スワヒリ語で、ずる賢い知恵の意）とは何ものか。それが知りたくて商売の列に加わり、炎天下、古着を売った。商才を発揮し、やがて大勢の小売商と取引する立場に。一躍、街の有名人となった。

信頼していた仲間に次々逃げられたこともある。仕方なく紹介してもらった若者はウソつきのお調子者。こちらの脇が甘いと金品をかすめ取り、でも落ち込んでいるとおとなしい。

「駆け引きなんです。だんだん気持ち良くなってきて、あ、ずる賢いやつ、楽だなと」

彼はある日、「お前はもう大丈夫」と言い残し、去って行った。約3年半にわたった調査での苦さも喜びもふまえて、痛感する。世界は広い。信頼や倫理の基準も、様々なのだ。

以来、一貫して、公の統計には載らない経済の研究を続ける。先の見えないその日暮らしても、いや、その日暮らしたからこそ、人間は強い。混沌の中でも自ら秩序を生み出す。そんな社会の可能性をみつめている。

幼い頃は、道徳の授業が嫌いで集団行動が苦手な「ひねくれた変わった子」だったという。ぐっと丸くなった今も、心根は変わらない。

「世界はできるだけ多様で自由で、スキマがあった方が豊かだと思います」

文・藤生京子 写真・長島一浩

3面に続く

「研究が進むときは、いつも偶然の出会いが」

フロントランナー

Front Runner (1面から続く)

小川 さやかさん 文化人類学者・立命館大教授

——とにかくまねできないフィールドワークだと、関係者が口をそろえます。

現地にとっぴりつかりたんですよね。事前の勉強を怠ると学問的な問いを見つけれないので準備には時間をかけますが、調査に入ったら勉強したことはサックリと忘れて。24時間つきあう中で切り口を見つけ、全面展開を目指します。

——24時間？

人類学の調査は、暮らして共にする「参与観察」が中核にあります。チョンキンマンションの安宿に暮らしたのも、深夜まで飲みにつきあうのも、調査に欠かせませんでした。もともと

と、はまると、寝てもきめても、そればかり考えてしまうアチなんです。

実際、商人たちの話は3割ほどしか本当でなかったりする。繰り返し質問して整合性を確かめないと。

タンザニアでの最初の調査のときは、300人近くに話を聞きまわりました。いつも同じところで私が驚いてみせるので、同行した助手は謎だったはずですよ(笑)。

ウソに理由あり

——助手の方とは、同じ屋根の下で暮らしたとか。

最初は長屋の部屋を借りて暮らしました。だんだん

遠慮もなくなり、しょっちゅうケンカしましたよ。口論から家出したこともあります。数日、別の街で頭を冷やして、どんな顔して帰ろうと案じていたら、家の戸に白旗が掲げられていて。

もう降参だ、仲直りしようぜって。そうやって友達になっただけでしたね。

——好奇心でどこまでも、という感じですか。そうですね。あと、ほれっほいんですよ(笑)。

恋愛感情ではないけど、好きな人たちと会えると思うと、張り切れる。ずる賢い駆け引きを見て格好いいと思う、采配のバランスのよさに、やるなど感心する。

ムスツとされたら、気になつて仕方がない。

老若男女にほれっほい。どぶろくを片手に話をするおばあちゃんの前へは毎日通いました。粹で渋くて。

——でも、だまされたりもしたわけでしょう。

初めは戸惑い、落ち込みましたね。でも、ウソには理由もある。「なぜウソをつくか理由を考えるんだ」と諭され、なるほど。

商売はクールな見極めが肝心です。親友ではないけどビジネススライクでもない、仲間という関係。依存しあうのも突き放すのもない、あんばい。真面目すぎても、ちゃんばらんでもダメ。バランスは彼らから学んだことです。

ゆっくりと往還

——こうしたテーマは、学問研究として、すんなり受け入れられたのですか。

私が大学院に入った頃は今と違い、生態人類学や農村研究が盛んで、都市研究自体がめずらしかった。テーマが定まらず、思い悩んだ時期もありました。

ようやく指導教員に納得してもらった渡航計画も、職人の徒弟制度でしたから。路上商人の研究に転じたのは、現地に行つてからで、偶然でした。

研究が進むときは、いつも偶然の出会いがあります。いろんな人に助けられ恵まれていたと思います。

「ずる賢さ、最高」といっている院生に戸惑ったと思います。恩師たちも熱心に指導してくれました。

——文化人類学という学問の自由さもありますか。人類学も地域研究も、こ

れはダメ、こうあるべきだというこちら側の基準が強いと、異なる社会の論理を見いだせない。事実を柔軟に受け入れる前提は、共有されていると思います。

例えば、私の調査対象である路上商人は貧困層で、また今回の本で書いた香港の商人には法に抵触する人も多くいる。なぜ貧困やグローバル化の問題を正面から扱わないのか、と言われることもあります。

——どう答えますか。学問にはいろいろな問いの立て方があります。資本主義経済について、ひずみを掘り下げるだけでなく、資本主義以外の経済のかたちを掘り起こして解き明かす、そんな方法も重要でしょう。あるいはストリートな提言の一步前にとどまらず、思索を深め、そこから提示できる可能性を広げることも意義があるのでは。

もちろん人類学者の関心や手法も様々で、貧困やジェンダー、開発援助など政策に直結する問題に取り組む人も多い。それでも人類学ならではの、自己と他者のあいだの距離を意識しつつ、ゆっくりと思考を往還させていくやりかたは共通かもしれないですね。

——今後の研究は。

いま貨幣論にはまっています。アフリカのビットコインなどの仮想通貨やモバイルマネーの地域通貨がどのような論理で使われているのか、研究しています。コロナ禍もあり、成果はまだ先になりそうですが、ずっと持ち続けているテーマのひとつに「無条件の条件」があります。国家や法、友情や信頼など一般的な必要とされる条件がなくとも、あるいは負の条件ばかりでも、社会や経済はどこまで回るのか。追究していければと思います。



商店街の活気にふれるのが好きという。教え子の大学院生が調査中に出町榎形商店街で。学生の指導にも熱心な先生だ—京都市上京区

プロフィール

- ★1978年、愛知県生まれ。
- ★幼いころから読書好き。物語の途中まで読み、先を妄想して作文するのが得意だった。
- ★中高とも吹奏楽部。
- ★1996年、信州大人文学部入学。山登りと海外放浪に明け暮れる。モロッコでは山中で道に迷い、電気もない村にしばらく滞在。「ヤギを追いかつてハトを撃つ生活。不安だけど楽しかった」
- ★2000年、京都大大学院アジア・アフリカ地域研究研究科入学。01年からタンザニア第2の都市ムワンザで調査。
- ★07年、大学院博士課程指導認定退学。09年、博士(地域研究)。11年、『都市を生きぬくための狡知(こうち)』(世界思想社)でサントリー学芸賞。
- ★13年、立命館大准教授。19年、教授。『チョンキンマンションのボスは知っている』(春秋社)刊行。写真は同年、香港でタンザニア商人たちと。
- ★他の単著に『「その日暮らし」の人類学』(光文社新書)。



◆今回は、音楽プロデューサーの小林武史さんです。音楽活動と同時に持続可能な未来のための場づくりを継続。千葉県に「集大成」と語る農場を開きました。